ユニバーサル農園事例集 別冊

CASE STUDY

農業と地域をつなぐ

農福連携の推進に向けた新たな取組への展開

CONTENTS

農福連携の推進に向けた新たな取組への展開

農業と地域をつなぐ

ユニバーサル農園事例集 別冊

はじめに

障害者就労施設によるユニバーサル農園及び農業の可能性 ―― 03

CASE STUDY

実践事例紹介 ―― 04

STAGE1 農業と福祉との接点［施設外就労］ ―― 06

インタビュー ―― 09

STAGE2 農業と地域コミュニティ［ユニバーサル農園］ ―― 10

インタビュー ―― 13

STAGE3 地域での農業の新しい価値［農業と地域をつなぐ農園］ ―― 14

インタビュー ―― 17

おわりに

農業が地域に与える力 ―― 18

INTRODUCTION

障害者就労施設による ユニバーサル農園及び農業の可能性

「ユニバーサル農園事例集」では、地域の様々な人たちが農業を体験できる場であるユニバーサル農園の様々な取り組みをご紹介しました。別冊である本誌では、障害者就労施設によるユニバーサル農園及び農業の可能性に焦点を当て、その一事例として社会福祉法人ゆうゆうの取り組みを紹介します。ゆうゆうは、農業者への施設外就労で農業との接点を持ったことを起点に、農業が地域のあらゆる世代をつなげていくユニバーサル農園に取り組みを発展させ、さらに、地域の中で農業の新しい価値を生み出す取り組みを行っています。このような具体的事例をステージごとに追いながら、本誌が、ユニバーサル農園をはじめようとするすべての関係者にとっての一助になれば幸いです。

ユニバーサル農園とは…

「農福連携等推進ビジョン（2024改訂版）」において、「障害者のみならず、生活困窮者、ひきこもりの状態にある者、犯罪をした者等の子どもから高齢者までの世代や障害の有無を超えた多様な者を対象として、農業体験活動を通じた交流・参画の場を提供するとともに、高齢者や障害者等の健康増進や生きがいづくり、メンタルヘルスの問題を抱える者等の精神的健康の確保、働きづらさや生きづらさを感じている者への職業訓練・立ち直りの場の提供など、農業体験活動を通じて多様な社会的課題の解決につながる場である」とされています。

※下記のリンクから、「報告書・レポート　ダウンロード申込」ボタンを押して、必要事項を記入し、資料をダウンロードしてください。

ユニバーサル農園事例集 https://insweb.jp/works/

CASE STUDY

実践事例紹介

農福連携を通じて地域とつながり、地域の資源になる農業を展開してきた社会福祉法人ゆうゆう。その活動の変遷を各ステージごとにまとめました。事業を進めていくアプローチのイメージが伝わるよう、地域のどのようなキーパーソンとつながり、どのような準備をへて、どのような運営を行い、続けていくにはどうすればいいのかなどをできる限り具体的に記載しました。また、それぞれの事業に関わる人や地域にもたらした良い影響や、キーマンのリアルな声も収録しています。

社会福祉法人ゆうゆう

北海道石狩郡当別町にある社会福祉法人。“「ひとりの想い」を文化にする”を理念に、子育て、介護、障がい者支援、生活困窮者支援など、分野を問わず地域に必要な福祉事業を行っています。「畑の広がる当別町の風景を残していきたい」という想いから、基幹産業である農業に着目。農福連携を通じて、住民を巻き込んだ地域活性化に取り組み続けています。

社会福祉法人ゆうゆう　https://yu-yu.or.jp/

設　立：平成25年2月25日

所在地：〒061-0231 北海道石狩郡当別町六軒町70-18

事業内容：障害者総合支援法に基づく障がい者地域生活支援事業、障がい者相談支援事業、介護保険法に基づく高齢者地域生活支援事業、子育て支援事業、福祉教育事業、調査研究事業 等

ゆうゆうの農福連携の変遷

HISTORY

きっかけ

どんな人にも働ける場所を

障がいのある児童が成長したときに、地域のなかに活躍のフィールドを用意したい。その想いが出発点でした。

STAGE1

→P06

農業と福祉との接点［施設外就労］

農業が、社会的支援を必要とする人の生きがいの場へ

農業者と福祉事業所のつながりかたや、双方にもたらした良い影響などについてご紹介します。

STAGE2

→P10

農業と地域コミュニティ［ぺこぺこのはたけ（ユニバーサル農園）］

農園を拠点にした地域住民がつくる自走するコミュニティ

障がい者の就労支援を中心に、地域の住民主体で運営していく仕組みづくりをご紹介します。

STAGE3

→P14

地域での農業の新しい価値［農業と地域をつなぐ農園］

多様な人の多様な価値を生み出す貴重な地域資源に

地域にとけこみ、地域を支え、多様な人が参加する農業経営の実践をご紹介します。

CASE STUDY_STAGE1

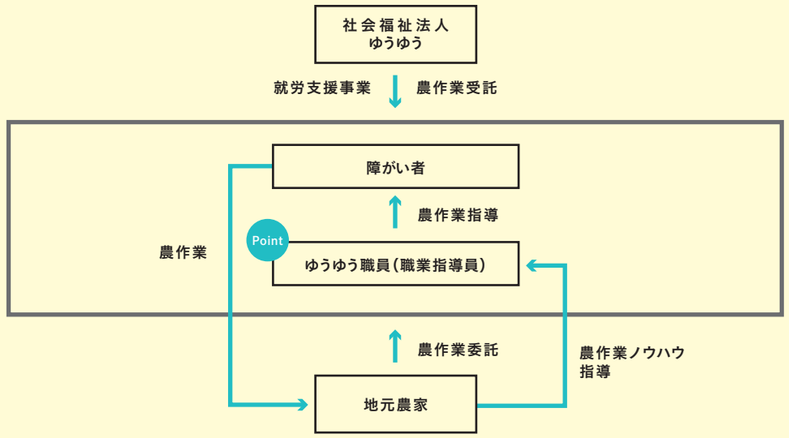
STAGE1 農業と福祉との接点［施設外就労］

農業が、社会的支援を必要とする人の生きがいの場へ

拠点概要

従業員　2名（職業指導員1名、管理者1名）
所在地　石田ファーム（北海道石狩郡当別町高岡1651）
事業内容　近隣農家の高齢化による人手不足に対して、障がいのある方が農家に出て活躍することで農業分野において新たな働き手になり、本人の自信や生きがいを創出する取り組み。

仕組み



\ Point /　福祉施設の支援員が、農業者と障がい者の間に入り、障害特性に合わせた作業指導をサポート

このまちの農業と福祉が、互いによくなる重なりを探して。

障がいのある児童へ福祉サービスを提供するNPO法人当別町青少年活動センターゆうゆう24。子どもたちが成長したときに、地域のなかでさまざまな活躍のフィールドを用意したいという想いから、施設外就労の取り組みがはじまりました。同法人が活動する当別町においても少子高齢化が進み、農業の人手や担い手不足が課題となっていました。地元農家さんから草取りや収穫など膨大な作業が追いついていないという困りごとを聞き、障がいのある人が畑で仕事することはできないかという会話のなかから、農福連携が具体的になっていきました。農業と福祉のつながりかたや、関わる人にもたらした良い影響などについてご紹介します。

活動の軌跡

STEP1　きっかけ

2010年　障がいのある子どもたちが大人になったときに、施設内だけでなく地域のなかでもいろんな働きかたができないかと模索していました。地域住民の声を聞くなかで、農業に担い手不足の課題や地元農家さんとの出会いがあり、福祉と農業の接点が生まれました。

新しい
働く場を広げる

STEP2　準備

2011年　福祉施設側としては、まずどんな農作業があるかを知ること。支援員が農作業を体験し、利用者さんにできる作業を考えます。農業者側としては、利用者さんの障がい特性や、どんな作業ができるかを理解すること。互いを知りながら、作業内容を擦り合わせました。

知る

STEP3　運営

2012年　1軒の農業者に対して、利用者さん3〜4名・支援者1名のユニットで施設外就労を運営。種まき、草取り、収穫などの農作業をできる限り具体的に指導することが大切。また、ひとつの作業を分解して切り出し、誰もが作業できるよう工夫しました。

障がい者だけでなく
ユニットで

STEP4　続けていくために

2013年　就労を支援する・される立場といった関係性ではなく、いっしょに働く仲間としての関係づくりが大切。また、ケガにつながる心配のある作業は事前にしっかり打ち合わせを行い、安心して生産性の向上に貢献できる役割をいっしょに探していきました。

対話を積み重ね
信頼性を築く

STEP5　次のステップへ

農福連携は、働く人や担い手不足など農業の課題を解消する選択肢のひとつに。農業の基本知識をもつ農福連携コーディネーターの活躍などにより、施設外就労は今後ますます取り組みやすい事業として、持続する農業や地域を担う一助となるでしょう。

福祉と農業を理解した
農福連携
コーディネーター

初期費用と運営収支

【初期費用】

農家さんと福祉事業所との間で作業内容や料金などを定めた業務契約を結び、農作業の一部を請け負ってはじめるため、初期費用がかからないのが作業受託（施設外就労）のメリット。

【月々の運営収支】

収入

障がい福祉サービス事業	410,000円
農家業務委託費	71,500円
合計	481,500円

支出

人件費	151,740円
事業費	214,965円
事務費	54,795円
工賃	60,000円
合計	481,500円

ポイント

POINT 1 農業者への良い影響

一つひとつの作業や作物を大事にしてくれる利用者さんの姿勢が、あらためて農作業への取り組みかたを見つめ直すきっかけに。また、利用者さんに現場の農作業を分解し、切り出し、わかりやすく伝えることを従業員にも任せることにより、パートさんや従業員の日々の仕事に対する責任感が以前より強くなりました。利用者さんとの関わりのなかで、みんなが一丸となって効率よく仕事を進めようとする意志や、作業の意味を意識しながら取り組むことができるようになりました。

POINT 2 福祉事業所への良い影響

施設内では見られなかった利用者さんの可能性を感じることができました。「こんなに集中力があったとは」「支援者がいない時間でも作業を続けられていた」そんな嬉しい驚きがたくさんありました。支援者だけでなく、農業者、そして地域の方々みんなで支え合うことで、障がいのある人が能力を発揮できる場が広がっていく。彼らも地域の基幹産業の担い手になれることを、肌で感じることができました。

[TOPICS] 職場が居場所になるしかけ

施設外就労先のひとつである当別町の石田ファームさん。ここでは、パートさんや従業員と利用者さんがコミュニケーションをとれるよう、利用者さんが就労体験にくる時間に合わせて休憩兼ミーティングを行いました。そのときに挨拶したり、その日の作業を確認したり、そういうことがあたりまえにできる環境をつくることで、利用者さんをいっしょに働く仲間として受け入れてくれたのです。これにより、利用者さんは職場に居場所ができ、前向きに就労体験にのぞむことができました。

CASE STUDY_STAGE1

INTERVIEW

関係者インタビュー

VOICE_01

菅原 秀和さん
（施設外就労立ち上げメンバー）

まずは気軽に農福連携を！

利用者さんが、地域の産業の担い手になれるかもしれない。活躍できるフィールドが広がっていくかもしれない。そんな期待を胸に施設外就労の立ち上げに取り組んでいました。いっぽうで、就労先である農家さんの役に立てるのだろうか、という不安も。就労体験をするなかで、農家さんから利用者さんに声かけされる内容により、利用者さんの状態が不安定になったらどうしようという心配もありました。利用者さんの障がい特性にあわせて、農作業を分解・切り出しすることはよく言われるところ。もちろんそれも大切ですが、単に農作業を依頼する・される関係性ではなく、ともに働く仲間としての関係性づくりの大切さを実感しました。たとえば、私たちがお世話になった農家さんでは、スタッフの方々が利用者さんに気さくに声かけしてくださったんですね。また、毎回、ミーティングを設けて、顔を合わせる機会をつくってくださったんです。このことがきっかけで、利用者さんたちが安心して作業に取り組めるようになっていきました。支援者という立場としても、きちんと仕事をし、農家さんに「また来てほしい」と思ってもらえるよう努めましたし、農家さんからは「とても助かっている」という評価も。農福連携に対して、あまりイメージが湧かないという方もいらっしゃるかもしれません。けれど、まずは気軽に就労体験を実施してみるのもおすすめです。支援者が利用者さんとの間に立ちコーディネートするので、やってみればそこまで敷居の高いものではありません。支援者としても、利用者さんの新たな可能性を感じる有意義な経験になると思います。

CASE STUDY_STAGE2

STAGE2 農業と地域コミュニティ［ぺこぺこのはたけ（ユニバーサル農園）］

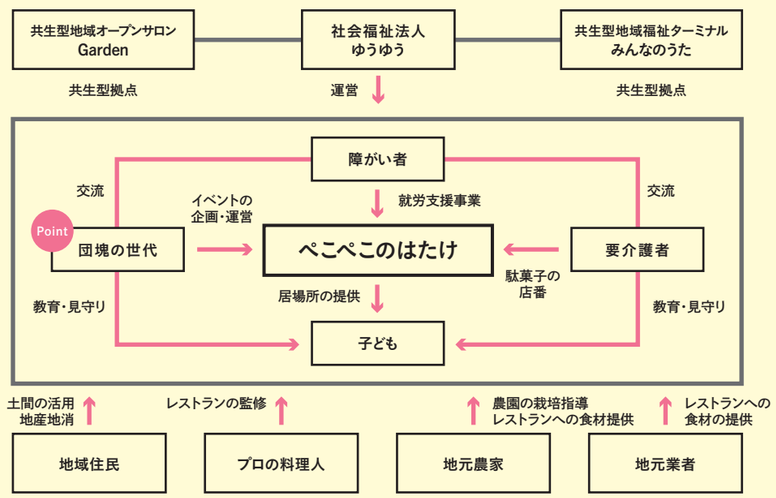
農園を拠点にした地域住民がつくる自走するコミュニティ

拠点概要

従業員　調理師1名、調理補助1名、パート1名、管理者1名
所在地　石狩郡当別町太美町1418-6
事業内容　就労継続支援B型、地産地消レストラン、駄菓子ボランティア、コミュニティ農園、ギャラリーの貸出、学習支援 など

仕組み

\ Point /
自発的に協力してくれる人をどう巻き込むかがポイント



農業が地域のあらゆる世代をつなげていく。

障がい者の就労支援を中心に、多様な人が集まり、さまざまなつながりを生み出す拠点。それが、当別町共生型コミュニティ農園「ぺこぺこのはたけ」です。地域がもっと元気になればという思いのもと、地元農家の指導を受けながら畑仕事をするコミュニティ農園、そこで採れた野菜や地元食材をつかった料理が楽しめるレストラン、地域住民が交流できる土間、要介護者が店番をする駄菓子屋を運営しています。農業を通じての要介護者の就労だけでなく、畑仕事をすることで認知症の周辺症状が改善された方もありました。また、地域の団塊世代が企画・開催するさまざまなイベントを通じて、地域住民をどんどん巻き込み、子どもたちの居場所の確保や、主催する団塊世代の方々にとっても生きがいの場につながっています。

活動の軌跡

STEP1　きっかけ

2010年　障がいのある人の就労の場でありながら、地域のあらゆる世代が交流もできる。そんな共生型コミュニティ農園をつくろうと立ち上がったのが、「ぺこぺこのはたけ」の起こりになります。当時の太美地区にはなかったレストランをつくり、農園で採れた野菜を提供する構想も生まれました。

障がい者だけでなく
農業の力で地域をつなぐ
コミュニティの場づくり

STEP2　準備

2010年　町内会長をはじめ、地域住民の方々への説明会を実施。この地区には現役を引退された団塊世代の男性が多いことから、経験豊富なその方々の力を地域で生かしたいと考え協力を仰ぎました。また、野菜づくりを習得するために、地元農家さんにアドバイザーとしての参入をお願いしました。

地域の
キーパーソンを知る

STEP3　運営

2011年　団塊世代の男性たちを中心に結成した「サポートクラブぺこちゃん」が運営メンバーとなって活動をスタート。障がいのある人との野菜づくりはもちろん、収穫祭などのイベントも積極的に開催し、地域のこどもたちも気軽に集まれる場になっていきました。

地域の人を
自然と巻き込む工夫

STEP4　続けていくために

2012年　さまざまな交流を楽しみながら続けていくことで、地域住民が自分たちでつくるコミュニティへ。一人ひとりが“自分ごと”として関わっていくことで、老後も豊かに暮らしていくにはどうすれば？といったことを考えるしかけづくりができました。

老後もこの地域で
豊かに暮らせる仕掛け

STEP5　次のステップへ

少子高齢化が進むなかで、地域のあらゆる世代や多様な人とのつながりを生み出すコミュニティ農園。ぺこぺこのはたけでの実践は、障がいのある人の本格的な就労や、認知症、ひきこもりの人の働くきっかけとなる「野布瀬農園」へつながっていきました。

ボランタリーベースの運営から
持続的に支援できる
サービス・環境づくり

大規模
農園の
運営へ

初期費用と運営収支

【初期費用】

収入

共生型基盤整備事業補助金	30,000,000円
日本財団助成金	4,690,000円
自己資金	11,089,449円
合計	45,779,449円

支出

施設設備	39,835,000円
厨房機器	1,021,545円
農業用ハウス	4,922,904円
合計	45,779,449円

【月々の運営収支】

収入

障がい福祉サービス事業	820,000円
喫茶事業（レストラン）	530,000円
その他	116,000円
合計	1,466,000円

支出

人件費	524,000円
事業費	749,000円
事務費	193,000円
合計	1,466,000円

ポイント

POINT 1 地域を知る

共生型コミュニティ農園をつくるうえで大切なのは、まずは地域の声を聞くこと。ぺこぺこのはたけでは、準備段階から町内会長や地域の方々との交流の機会を多く設けました。その交流のなかから、太見地区の基幹産業が農業であること、しかし農業の担い手不足が課題であること、この地区には団塊世代の男性が多いこと、レストランがないこと、みんなが集まる場所があったらというニーズが見えてきました。地域の方々にとって「この農園があってよかった」と思える、ひらかれた農園づくりを大切にしました。

POINT 2 住民を巻き込み、自走する農園へ

団塊世代の男性たちを中心に結成した「サポートクラブぺこちゃん」として活動し、2ヶ月に1回イベントを企画・主催。イベント後には“反省会と称した飲み会”も。まず自分たちが楽しむことを大切に、地域住民をどんどん巻き込み、地域のみんなでつくるコミュニティ農園へと育っていきました。このように、コミュニティ農園に地域を巻き込むしかけをつくれば、次第に住民主体の運営へ移行し、自ずとコミュニティが自走していく体制に。地域住民とともに楽しみながら続けていくことで、無理のない運営が可能になります。

[TOPICS] 生きがいを取り戻し、みるみるいい表情に

長年自宅での野菜づくりを生きがいとしていた認知症（要介護2）の92歳の女性Iさん。スタッフの見守りのもと「ぺこぺこのはたけ」で秋大根を育てることに。畑仕事をするIさんの所作はとても格好よく、仕事終わりにお茶をおいしそうに飲む姿がとても印象的でした。収穫までの4カ月間、子どもたちに野菜のことを教えたり、これまで交流のなかった地域の方々と畑仕事をしたりするIさんの表情がキラキラと輝いて見えました。要介護になっても生きがいを手放さないことの大切さを感じました。

CASE STUDY_STAGE2

INTERVIEW

関係者インタビュー

VOICE_02

石田 清太郎さん
（石田ファーム）

地域にとけこむ農園

「ぺこぺこのはたけ」には、農園運営のアドバイザーとして携わらせていただきました。ゆうゆうの職員さんからこの話をいただいたときに「いいな」と思ったのは、ぺこぺこのはたけのコンセプトでした。「地域にとけこむような農園にしたい」という想いに大きく共感したんです。当別町の基幹産業である農業を通じて、子どもたちからお年寄りまで集まれるようになっていて。私自身、ここに集まるご年配の方から地域の昔話を教えてもらったり、子どもたちの素直な発言にハッとさせられたりと、いい経験になりました。また、障がいのある利用者さんといっしょに作物をつくれたことは、のちに自分が経営する農園に障がいのある方々の就労を受け入れるきっかけとなりました。トレイに種を入れる人、土をかぶせる人、草取りなどなど、日々利用者さんのそばにいる職員さんと話し合いながら、ひとつの農作業でもいろんなやりかたが見えてくる。できることを細分化していくと、人それぞれに役割ができていくんですね。みなさん一つひとつの作業や作物に対して、「大事にしてくれてるな」という姿勢が伝わってきて、農業者として初心を思い出させてくれたことも印象に残っています。高齢、過疎化が進む当別町において、農業が衰退すれば地域も衰退してしまいます。だからこそ、地域のあらゆる人たちとつながっていくことは、地域と農業を支える第一歩。ぺこぺこのはたけは、まさにそんなコミュニティでしたね。

CASE STUDY_STAGE3

STAGE3 地域での農業の新しい価値［農業と地域をつなぐ農園］

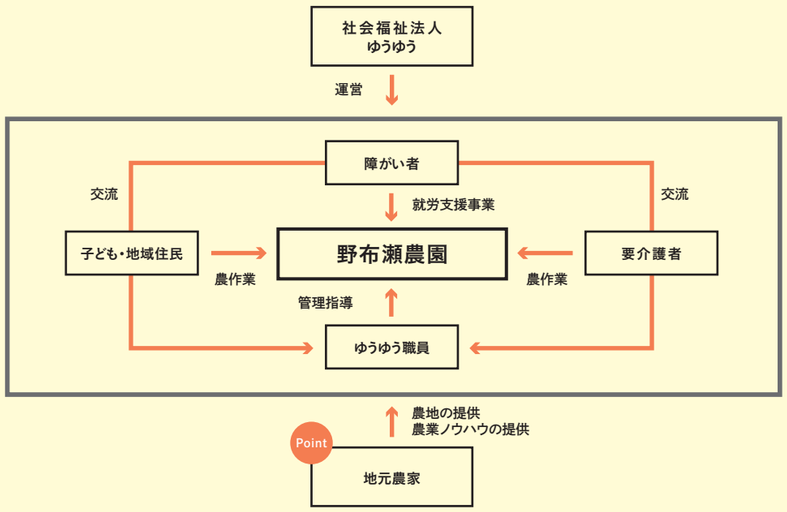
農業が多様な人の多様な価値を生み出す地域資源に

拠点概要

従業員　2名（常勤職員1名、兼任職員1名）
所在地　北海道石狩郡当別町字弁華別63番地3
事業内容　農業と福祉が連携し、障害者の農業分野での活躍先（障害者の就労先の確保）を通じて、農業経営部門の発展とともに、障害者の自信や生きがいを創出し、社会参加を実現する取り組み。

仕組み

\ Point /
農地確保のために農家さん、行政、住民との信頼関係づくりが大切



いろんな人の「はたらきたい」と、地域の想いを叶える農園

弁華別地区の離農された農地を利用し、地域の基幹産業である農業の活性化や障がいのある人の工賃向上をめざして開園した野布瀬農園。廃校になった小中学校を活用した生活介護事業所を拠点に、広大な田んぼや畑で専門的農作業を行っています。誰もが参加できる農業を営むうえで大切なことは、地域の想いをくみとり、その課題解決に向けた取り組みを行うこと。野布瀬農園では、地域の途絶えかけた農業を振興し、自らが農作業を行うことで地域住民が気軽に集まれる場をつくり、障がいのある方、認知症の方、学生、お年寄りの「はたらきたい」想いとともに、みんなで頼り合いながら活動しています。

活動の軌跡

STEP1　きっかけ
2017年
当別町弁華別地区に、生活介護事業所を設立することに。地域の方々にお話を聞いたところ、①米づくりの担い手が減っている。②伝統文化も途絶えそう。③山林も手つかずで荒れ地に。という困り感が。これらの課題に応えられるものを探しはじめたことが、この野布瀬農園のきっかけに。

地域の課題をリサーチし
地域の人の想いを事業に
課題 × 想い

STEP2　準備
2018年
当別町で農地を取得するための条件は、1年間の米づくり研修を受けること。近隣農家さんにお願いして米づくりを見習う最中、ご主人に先立たれ農業を続けていけないという奥様と出会います。町内会長のご尽力とスタッフの熱意も伝わり、農地を受け継ぐことに快諾していただきました。

農地確保が
重要課題
1年の米づくり研修 ＋ 農地保有者との信頼関係づくり

STEP3　運営
2019年
農作業をするのは生活介護事業所の障がいのある人たちです。籾まき、野菜の種まき、肥料運び、水やり、田植え、稲刈りなどの作業を切り出し、役割分足して手作業で行います。できたお米や野菜を道の駅、スーパー、ECサイトなどで販売。その売上で設備の減価償却と工賃を捻出して運営します。

運営戦略
販売先の確保

STEP4　続けていくために
2022年
地域の方々、ゆうゆうのスタッフ、利用者さんなどといっしょに、田植え体験と稲刈り体験を毎年実施。イベントだけでなく、稲をはさがけしていると「懐かしいねえ」と地域のお年寄りが来てくれたり、草刈りの依頼があったり。地域のなかに溶け込みながら、いろんな人が集まれる場になりました。

地域の人との
接点をつくり続ける

STEP5　次のステップへ
2024年
地域の方々とのつながりを大切に、これまで通りお米や野菜を収穫し、きちんと出荷していくことを続けていくことが目標です。また、農家が所有する山林を整備する取り組みもはじまっています。誰もが参加できる農業を営みながら、森を有効活用することで新たな仕事やつながりが生まれています。

NEXT STAGE
あらゆる人が
関われるよう幅を広げる
林業へ可能性を広げる

初期費用と運営収支

【初期費用】

収入	
設備資金借入	14,330,000円
自己資金	8,450円
合計	14,338,450円
支出	
用地・建物購入費	14,338,450円
合計	14,338,450円

【月々の運営収支】

収入	
農産物売払い収入	5,044,000円
合計	5,044,000円
支出	
事業費	831,865円
事務費	1,062,825円
就労支援原価	1,070,000円
工賃	988,325円
減価償却費	552,554円
合計	4,505,569円

ポイント

POINT 1 利用者さんの手作業が、農業経営の大きな力に

野布瀬農園では、農作業に人をあてはめるのではなく、その人の障がい特性や特徴的な感覚を農作業に応用することを大切にしています。利用者さんがせずにはいられない行動を仕事につなげたり、作業のやり方や道具の使い方を工夫したり。そんなふうに利用者さんの可能性を引き出していくことで、誰もが働ける場所になります。利用者さんたちにしかできない手作業もたくさんあります。スタッフが機械作業を行い、利用者さんが手作業を行うことで、同時進行で作業を進めることができます。

POINT 2 ユニバーサル就労

生活介護事業所の利用者さんが農作業に携われたらとはじめた野布瀬農園ですが、活動していくなかで認知症やひきこもりの方、生活困窮の方、お年寄りや学生など、さまざまな人の働きたいという想いに出会いました。太陽を浴びて、汗をかいて、土をさわって、農作業をして、お茶を飲む。農業には、多様な人を受け入れられる懐の深さがあります。静かに作業したい人も、ワイワイみんなと作業したい人も、農地が広大なので、それぞれの作業環境を整えることだってできます。こういったことも、農業ならではの魅力のひとつですね。

[TOPICS] 農業が、前へ進むきっかけに

就労体験に参加したけれど、なかなか仕事に来れなかったNさん。そこで、月に一度、母親を交えて面談することに。話を聞くとNさんの口から「今まで生きてきて楽しかったことがない」と言うのです。けれど、面談には欠かさず来てくれました。ある日、父親からの「これから楽しいことを見つけたらいいじゃないか」という言葉を受け、久々に農園へ。そのとき農業ボランティアの方が普段通りに声をかけてくれたのが嬉かったNさん。それからというもの、Nさんはどんどん前向きになり「自分で生きていきたい」と、今でも農家の仕事を続けています。

CASE STUDY_STAGE3

INTERVIEW

関係者インタビュー

VOICE_03

関原 確さん
（ゆうゆう職員　野布瀬農園）

VOICE_04

前澤 良さん
（弁華別地区 町内会長（当時））

VOICE_05

重原 昌章さん
（農業委員会 会長（当時））

誰もが参加できる農園をめざして

関原：
前澤さんには米づくりをいちから丁寧に教えていただき、重原さんには農地取得の際にご尽力いただきました。そして、農地をお譲りいただいた野布瀬さん。私たちがこの地域でみんなといっしょに生きていくんだという想いを込めて、地域の方の名前を残そうと名付けたのが「野布瀬農園」の由来です。多様な人と米や野菜をつくり農業を営むこと。また、地域の方をお呼びし、田植え、収穫イベントを企画し、地域の方々が集まりたくなる場所にすること。この地域の一員として、誰もが参加できる農園をめざして、これからも精進してまいります。

前澤：
「米づくりの研修に来たい」ってゆうゆうさんにお願いされたんだけど、人に教えるってけっこう大変でしょ。だから最初は断ったんですが、熱意に負けちゃって（笑）農園の農地のほとんどは水田なんだけど、広大なので作業しにくい場所もあります。それでもそこを引き受けてくれて、畑もはじめてくれたのはありがたいこと。圃場だけでなく、そのまわりもきれいに草刈りもしてくれてるし助かってますよ。ゆうゆうさんに農地を任せてよかったと思っています。

重原：
ちっちゃい子どもが田んぼのなかで泳いでいたり、どろんこで走り回ったり。まるで50年前かと思う風景が、野布瀬農園にはひろがっています。農家の土地で、子どもたちがいたずらしながら遊べる場所って今はないですから。はさがけしていたら、ご近所さんが「そのやりかたはちがうよ〜！」なんて言ったりしてて、いろんな交流もできてるんじゃないですか。うちの孫も稲刈りさせてもらったこともあって、いい体験ができる場所をつくってくれたなと思います。

さいごに

農業が地域に与える力

農業と福祉との接点。農業と地域コミュニティ。地域での農業の新しい価値。といった各ステージの実践を通じて、農業の新たな可能性をご紹介しました。障がいのある方だけでなく、さまざまな生きづらさを抱える人や高齢者のはたらくきっかけになる農業。農作業を工夫すれば、誰もが担い手になることができ、生産性をどんどん上げられる農業。空の下で汗をかき、世代をこえた交流を生み出し、地域を元気にできる農業。少子高齢化、担い手不足、荒廃地、それらによる地域の衰退。こうした課題に対して何らかのアクションを起こすとき、まさに「農業」は課題解決の糸口となるかもしれません。農業の可能性を体現する取り組みが、今後さらに広がりをみせることを切に願っています。

CREDIT

発行日 令和7年3月　**発行元** (株)インサイト　**事業名**「農福連携の推進に向けた新たな取組への展開」

事業実施者 (株)インサイト　**協力者** (社福)ゆうゆう　CANVAS DESIGN　ふじわらゆうき仕事室

本書は「令和６年度農山漁村振興交付金」を活用して作成したものです。